

論文審査の要旨  
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 ( 文学 ) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	田 豊
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 日中言語における鏡像語研究 —中国語を母語とする日本語学習者を中心に—			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授	佐藤 利行	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	高永 茂	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	今林 修	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	佐藤 暢治	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、中国語を母語とする日本語学習者が、学習過程において鏡像語をいかに受容しているのか、といった点についてアンケート調査に基づき考察したものである。現代日本語には「出演—演出」「出産—産出」のような字順が逆転する二字の漢語が存在する。こうした漢語を「鏡像語」と呼ぶが、現代中国語にも同様に鏡像関係にある語彙が存在し「同素逆序詞」と呼ばれている。また日中の漢語には「用意—用意」のような同形語も多数存在するため、学習者は鏡像語と同形語を誤用する現象が生じている。本論文は、こうした問題を解決するための基礎研究とも言える。論文は序章、第一章「産出調査 (調査1)」、第二章「認知調査 (調査2)」、第三章「母語干渉調査 (調査3)」、第四章「日本語教育への応用と実践」、終章の全六章から構成されている。</p> <p>序章では、研究の背景と目的、本研究で扱う用語について説明し、先行研究を分析している。</p> <p>第一章では、CLJ (Chinese Learner of Japanese) の日中鏡像語の産出について考察し、語彙の習熟度が鏡像語の使用を左右する根本的な要素であることを解明している。習熟度が高い場合には、他の要素に左右されることなく、両言語の語彙を照合する形で対応する語彙を産出することができるが、習熟度が低い場合には、語彙の使用を正しく把握することができず、「表現選択」と「中国語代入」というストラテジーを用いている。</p> <p>第二章では、CLJ の日中鏡像語の受容について考察している。CLJ が日本語語彙を解釈する際に用いるストラテジーには、「直接対応」「言語知識」「文脈連想」「中国語義対応」の四種があり、その中の「直接対応」は調査1での「直接対応」と「中国語代入」の規則とほぼ同じであり、「言語知識」に属する「文法知識」と「文脈連想」の二種は、調査1では現れることがなく、CLJ が日本語を受容する場面だけに用いるストラテジーであることを明らかにしている。</p> <p>第三章では、CLJ の日中鏡像語の適応能力を選択肢問題によって考察し、調査1と調査3の結果を比較することにより、CLJ がどのような日中鏡像語に対して母語の干渉を受けて誤用しやすいかを考察している。その結果、習熟度が正用率の決定要因であることを明らかにした。また、未習熟の語に直面した場合には、JSL (Japanese as Second Language) は言語知識に関する手掛かりを通して</p>			

判断する傾向があるのに対し、JFL (Japanese as Foreign Language) は中国語と対照する方法をより好むことを明らかにした。

第四章では、中国語を母語とする日本語学習者が、鏡像語を理解するための方策について考察する。調査1・調査2・調査3の分析から、日中鏡像語習得のための要素として「表現形式」「語義関係」「品詞関係」の三つの要素があり、それが日本語習得に大きく影響していることを明らかにした。「表現形式」については、暗記記憶によって比較的簡単に語彙の区別ができること、「語義関係」「品詞関係」については、日中鏡像語の対応付けが非常に複雑であるためにその区別が容易ではないことが明らかになった。このことから、日中鏡像語を効果的に教授するには、「語義関係」「使用方法」「漢字構造」の三つの角度から、授業と課外学習において指導することが効果的であることを提案している。

終章では、本研究で得られた知見をまとめ、今後の研究課題について述べている。

以上、本論文は、中国語を母語とする日本語学習者が日中鏡像語を理解するための基礎作業としてアンケート調査を実施して、その結果を検証したものである。調査対象やインタビュー調査が十分ではなかったことなど課題も残るが、鏡像語の習得という、これまで日本語教育の中で十分には把握されていなかった問題を取り上げ、それを独自に解明した意義は大きく、中国の大学における日本語教育に貢献する研究として評価でき、今後の研究の進展が期待される論文である。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)